

薬史学会通信

No. 3 1986年 5月

東京都千代田区神田駿河台
日本大学理工学部薬学科内
日本薬史学会事務所



就任ご挨拶

日本薬史学会々長
野上 寿

唯今、30有余年の輝やかなしい歴史を持つ日本薬史学会の会長に私が選任されました。初代会長朝比奈教授、二代木村教授の後をお引き受けすることは誠に光栄の至りではありますが、責任の重大さに身の引きしめる思いであります。

薬史学会は長い伝統の上に立ち、特に最近では吉井会長代行を始め、熱心な幹事諸君の献身的活躍により、その活動はとみに活発となったことを感じさせられます。

私はこの良き気運に乗り、新たに就任して戴いた評議員諸兄並びに会員諸君と力を合せ、会の活性化と民主化、近代化をはかり、会の隆盛を期したいと存じます。

薬の歴史を通じて、日本の文化、社会の発展の歴史をさぐることは、まことに意義深いものがあり、医学、薬学の進歩はもとより、文化、社会の発展に貢献すること大なるものと信じます。会員諸君の奮起を期待し、御支援を願うものであります。

一言所感をのべて、就任の御挨拶と致します。有難う御座居ました。

パンフレット「清水藤太郎博士の業績を偲ぶ」の配布について

既報のように、日本薬学会第106年会(千葉)薬史学部会シンポジウム会場において、内藤記念くすり博物館の寄贈になるパンフレット「清水藤太郎博士の業績を偲ぶ」が参加者に配布されました。同冊子は残部がありますので、入手希望者は氏名と郵送実費300円(郵便切手同額分でも可)を同封して、本会事務局まで連絡して下さい。一部あて郵送いたします。

(2) 出雲神話の薬物療法

宗 田 一

出雲神話に登場する有名なオオナムチ（大國主の神）にかかわるイナバのシロウサギと火傷治療の伝承物語は、古典にみえるわが国最初の薬物療法物語である。⁽¹⁾

前者では、ワニのために丸裸にされた「素菟」がオオナムチの教えた「蒲黄」でもとの皮膚のように回復し、後者ではオオナムチが焼石で火傷死したのを、「蜃貝ヒメ」と「蛤貝ヒメ」の手当てで蘇生させたという、ともに外用療法であった。

この伝承物語は、わが国の経験的薬物療法の由来を語った民話風の説話と受け取られている。しかしそこに示された薬名など問題点が指摘されているので列記してみる。

○蒲黄のこと

多くの校訂本で蒲黄は「カマノハナ」と訓じられている。10世紀前半の『本草和名』・『和名抄』も、蒲黄にカマノハナの和名を当てているので、奈良時代のそれも同じ和名だったとの類推である。

これら字書にみえる蒲黄は漢薬の名称で、現在の蒲黄（ガマの雄花の黄色花粉）と同じものである。とすれば、出雲神話のそれもガマの花粉とみてよいのだろうか。ところが、戦前の小学校唱歌にあるようにガマの穂綿（雌花の穂絮）とみる意見もある。

もっともこの唱歌に、「ガマの穂綿をとり敷けば、兎は元の白兎」というのは問題がある。『古事記』の文面では、「モトノ膚」になるといい、本居宣長『古事記伝』（以下「記伝」と略す）がこれを「皮（膚）も毛も本の如くなるを云」と解しているが、「皮膚がもとのように癒えるという意で、毛のことは含まれない」とするのが現在の大方の解釈である。⁽²⁾

○素菟のこと

本居宣長が「素」を「裸の義か」（「記伝」）

とする解釈は現在採用されず、素菟は「シロウサギ」と訓じられている。⁽³⁾

7世紀以前の日本に家兎は存在していないから、これを野兎とみれば、野兎のほとんどは、年間を通じて褐色毛をもっているのが普通である。では、シロウサギとは、何を意味するのか問題となる。

野兎の毛が突然変異で白色になることが稀れにみられ、またエチゴウサギ（トウホクノウサギ）のように、冬季雪中で適応の保護色として白毛化するのがある。

「このため西南日本では白いウサギを珍しがり、神秘的なものとして山の神の仮りの姿と考えた痕跡も認められる。」と千葉徳爾は指摘する。⁽⁴⁾

こうなると、「記」にいう素菟は特別な意味をもったシロウサギだということになる。「シロ」は神の色でもあって、シロウサギを瑞物とし靈物視したことは、中国にも見られる。

だから、「記」では「いまは菟神という」と記すように、シロウサギが巫女の神使いの動物から転じて神として祀られるようになったものと見られる。

このように考えてくると、シロウサギが出現する冬季がこの物語の背景になっている。とすれば、この季節にはすでに落下してしまった雄花の黄色花粉ではなく、雌花の花穂が成熟して白色穂綿となり飛散する冬季が「記」物語の作者のイメージにあったと見ねばなるまい。

しかもそれが、ガマの白色穂綿とシロウサギの白毛との類似からくる類感呪術としての呪術的医療をも意味するものとすれば、この物語を単に経験的薬物療法の由来を語ったもの、とだけ見ることは片手落ちというべきだろう。

○「蛭貝ヒメ」と「蛤貝ヒメ」

蛭貝と蛤貝を神格化したこの物語の蛭は字書にないということで、「記伝」はこれを蛞とし、この説が現在通用している。

蛞は『本草和名』には見えないが、『和名抄』に「キサ」の和名で出ている。

一方、蛤は両書ともに数種の蛤類が挙げられていて、そのうち「ウムキ(ウムギ)ノカヒ」の和名をもつ海蛤が「記」の蛤貝だとし、これら古名のキサはアカガイ、ウムキ(ウムギ)はハマグリとするのが、現行諸校訂本の通説となっている。

しかし、「ハマグリ」の和名は『和名抄』が蚌蛤に当てられていて、「記」の蛤貝をハマグリに限定するのは問題がありそうだ。

海蛤を海産の諸蛤の爛殻(海水で磨りへらされた貝殻)とする李時珍ら中国本草家の意見を採るならば、同じ考えに立つ浜田善利ら⁽⁵⁾が、金丸但馬の説を採用している、「海辺にうちあげられた種々の貝殻の総称」、「海岸に堆積する貝砂」と見る限り、ハマグリ説は訂正の要があることになる。

とすれば、「記」が海貝類の総称の筈の蛤貝(海蛤とみて)のほかに蛭貝をベアーで出して来たのは何を意味するのだろうか。これは蛤貝殻のほかに蛭貝の肉質部⁽⁶⁾を使用するためのものだったと見ることも可能となる。

ところで、「記」のこのくだりの解釈は、諸書によって差違がある。

たとえば、角川文庫版では、武田祐吉訳注(P.41)として、「赤貝の汁をしぼって蛤の貝に受け入れて母の乳汁として塗った」とあるが、倉野憲司校注の岩波日本古典文学大系本(P.95頭注)では、「けずりおとした赤貝の粉を集めて、それを蛤の汁で溶いて塗った」とし、岩波日本思想大系本(P.65頭注)も似たような解釈をとっている。

ここではまったく正反対の解釈であるが、「記伝」にいう「集」を「焦」の誤りとする説は何れも採用していない。

焦説をとるとすれば、赤貝を粉末にして焦焼(灰化で黒焼ではない)したものを蛤汁で母乳のようにして塗ったということになる。

参考文献

- 1) 伊沢凡人:「稲羽の素菟」伝承の医学, 古医学月報(15), (1974); 同『和法』出版科学総合研(1977)再録
- 2) 安江政一:古代および民間医療の考察一特に蒲黄, ガマの花粉と冠毛について, 薬史学雑誌12(1), 1~6(1977)
- 3) 新村 拓:記紀神話と医療(上), 日本医史学雑誌24(3), 28~37(1978); 同(下)同誌24(4)64~73(1978)
- 4) 宗田 一:古代薬物の同定と歴史性の問題, 和漢薬(300), 93~95(1978)
- 5) 宗田 一『日本の名薬(売薬の文化誌)』97~8, 八坂書房(1981)
- 6) 森 納『因伯くすり雑考(=)』, 1~7, 223~5, 自家版(1984)

(注)

- (1) この物語は、『古事記』のみにあって『日本書紀』には見られない。もっとも、『因幡国風土記逸文』といわれるものにも載っている。しかし、この逸文(今井似閑採扱, 『塵袋(10)』所収)は、武田祐吉のいう第5類(風土記類似の書を引用したもので、秋本吉郎(岩波『日本古典文学大系2—風土記』478頭注)は「風土記とは別種の地方誌か、古事記の説話・文辞に基づき、加筆したものの如くである。」といっている。
- (2) 例えば、岩波日本古典文学大系本(p.93), 岩波日本思想大系本(p.63)など。
- (3) 「素」には白色の意があり、それらの例示については、岩波日本思想大系本p.63頭注など参照。
- (4) 『平凡社大百科事典』②—222。
- (5) 浜田善利・古賀朋子・村上誠愨:貝類生薬の本草学的研究(第2報), 薬史学雑誌14(2), p.59; p.65(1979)
- (6) 蛭を通説に従って蛞とみても、蛞には数種(アカガイも含まれる)あり、現行の『中薬大辞典』が殻を用いるときは瓦楞子(上冊p.400), 肉部を用いるときは蛞(下冊p.2109)と区別しているのも、現代のことではあるが一つの参考になろうか。

外国会員 H.R. Fehlmann 氏よりの通信

氏はスイス薬史学会々長で、日本薬史学会創立30周年記念号に際し祝辞を寄せられた。その後、山田光男幹事と文通を重ねられている中で、近年スイスで出版の医薬学史関係の図書につき触れられているので要約紹介する。

W.F. Daems : Johann Anton Grass(1684 ~1770) 内科医, 軍医, 尿診断技術者, 薬剤師, 獣医, 地方政治家, テラ・グリュシュナ出版社, Chur, スイス, 1985, 334ページ。

J.A.Grass は18世紀グリソン州(スイス東部山岳地帯)の山岳医で医療に関する多彩な活動を行った。本書は地方の博物館にあった古文書に依って書かれており、当時の状況について従来知られていなかった事項も含まれている。

著者 Daems 氏は1911年生れ、オランダの薬剤師出身で、1965年来スイスの企業で医薬品部を創設するかたわら中世の医薬学史を研究、ヴュルツブルグ大学で医学史を講義している。

P.Julien, F. Ledermann : 聖コスマスと聖ダミアン, 礼讃と肖像研究, スイス薬史学会出版, 第5巻, ユリス印刷出版社, チューリッヒ, 1985, 127ページ。

編者の一人 P. Julien 氏は有名なフランスの歴史学者であり、今一人の F. Ledermann 氏はスイス薬史学会の幹事である。両氏とも医師および薬剤師の守護神として崇められている聖コスマスおよび聖ダミアンについて専門的に深く研究していたが、これに刺激されて1984年、スイス薬学会総会時に、欧州9カ国よりなる専門家のシンポジウム開催が決められたのであった。

本書は挿し絵が多く、課題も豊富で、神学者、社会学者、民族学者、医・薬史学者、美術史学者さらには一般の人々の何れもが、2聖者に対する興味をひくに十分であろう。



W. Götz 氏, 本会を西独に紹介

一昨'84年、薬史学集談会で19世紀後半におけるドイツ製薬事業などについて講演をされた W. Götz 氏(薬史学雑誌20, 1, 参照)は Pharmaziegeschichtliche Rundschau (薬史学評論)誌—Pharmazeutische Zeitung第130巻38号付録, 1985年9月19日号に日本の薬史学雑誌18巻(1983)所載の論文要旨を独訳して紹介されている。(上図)

薛愚(主編): 中国薬学史料の出版

中国薬学会の重鎮である薛愚先生が中心となって、中国薬学史料, B5版, 485ページが1984年7月、人民衛生出版社から発刊された。

第一編は中国古代薬学史で、原始社会(紀元前50万年)から漢末(265)までを扱い、第二編は中国中古期の薬学で、両晋からアヘン戦争期(1840)まで、第三編は中国近代薬学史で、解放時(1949)までを述べている。

東アジアの薬史学研究のなかで重要な位置を占める中国の薬史学事情を学ぶ際の出発点となる資料であろう。

日本薬史学会総会（千葉）報告

総会は、昭和61年4月3日、日本薬学会第106年会、薬史学部会々場において開催。まず吉井会長代行の挨拶ののち、伊藤和洋氏を議長として議事が進められた。

(1) 昭和60年度会務・会計報告：事業概要ならびに別項の決算報告、同監査報告がなされ、この中で、評議員就任について各方面より応諾の返事がある旨も報告された。

(2) 会則改正：本会の活動も少しく活発になってきているので、通常会員会費を明年度より5,000円に値上げし、賛助会員会費を一口30,000円とする旨提案された。

(3) 昭和61年度事業予定および予算案：従来通り年2回の薬史学雑誌発行のほか、薬史

学会通信3回、評議員会の開催準備（明年度総会時を予定）、会員拡大などを含む別項の予算案が提出され、何れも承認。

(4) ついで役員選出に入る。吉井会長代行はとくに発言を求め、本会の永続発展のため、会員の野上寿氏を会長候補に推薦したいこと、幹事は留任としたら如何か、と申し述べられた。総会は万場一致で承認。

(5) 野上寿新会長は別項のような挨拶をされ、ついで木村雄四郎前会長を名誉会員に推薦したい旨提案、全員はこれを承認した。同時に別項の方々に評議員を委嘱する旨報告し全員は賛意を表した。

以上で予定議事を終了し、閉会となった。

日本薬史学会 昭和61年度役員

会長：野上 寿

幹事：青木 允夫、伊藤 和洋、石坂 哲夫、
江本 龍雄、川瀬 清、宗田 一、
田辺 普、滝戸 道夫、長沢 元夫、
難波 恒雄、西岡 五夫、根本曾代子、
山田 光男、吉井千代田

昭和60年度決算

収入の部

	予 算	決 算	増 減 △
前年繰越	536,683	536,683	0
賛助会費	510,000	315,000	△ 195,000
一般会費	704,000	577,500	△ 126,500
学生会費	4,000	4,000	0
投稿料	100,000	122,250	22,250
広告料	40,000	0	△ 40,000
雑誌販売	10,000	58,800	48,800
雑	5,000	6,000	1,000
利子	3,000	4,687	1,687
	1,912,683	1,624,920	△ 287,763

支出の部

	予 算	決 算	増 減 △
印刷費	1,830,000	1,461,788	△ 368,212
通信費	60,000	43,020	△ 16,980
事務費	12,683	0	△ 12,683
雑	10,000	450	△ 9,550
	1,912,683	1,505,258	△ 407,425

繰越残 △ 119,662

会員の異動(昭和60年度決算時)

	前年度	資格変更		入会	退会	
		+	-			
賛助会員	17				1	16
一般会員	176		3	6	7	172
学生会員	2					2
		3				3

昭和61年度予算案

収入の部

	前年度	予 算	前年比
前年繰越	536,683	119,662	△ 417,021
賛助会費	315,000	480,000	△ 165,000
一般会費	577,500	688,000	△ 110,500
学生会費	4,000	4,000	0
投稿料	122,250	250,000	127,750
広告料	0	70,000	70,000
雑誌販売	58,800	10,000	△ 48,800
雑	6,000	5,000	△ 1,000
利子	4,687	3,000	△ 1,687
	1,624,920	1,629,662	4,742

支出の部

	前年度	予 算	前年比
印刷費	1,461,788	1,550,000	88,212
通信費	43,020	60,000	16,980
事務費	0	9,662	9,662
雑	450	10,000	9,550
	1,505,258	1,629,662	△ 124,404

日本薬史学会昭和61・62年度評議員

浅野正義	高島堂薬局・東京・文京	滝野吉男	静岡薬大
市川正孝	長崎大・病・薬	辰野高司	日本薬剤師会
井上隆夫	星薬大	富松利明	徳島大薬
井上哲男	公定書協会	富森毅	北陸大薬
上田亨	北大薬	名取信策	明治薬大
遠藤浩良	帝京大薬	中川富士雄	東京大・病・薬
太田長世	大阪薬大	中村健	日本大理工・薬
小原正明	城西大薬	西部三省	東日本学園大薬
奥田潤	名城大薬	橋本庸平	神戸女子薬大
奥田拓男	岡山大薬	浜田善利	熊本大薬
大塚恭男	医学学会	曳野宏	東北大薬
大橋裕	長崎大薬	平賀敬夫	明治薬大
金久保好男	千葉大・病・薬	久道周次	東北薬大
金庭延慶	昭和薬大	藤井正美	神戸学院大薬
鹿野美弘	北海道薬大	藤村一	京都薬大
北川勲	大阪大薬	古谷力	北里大薬
喜谷喜徳	名古屋大薬	堀岡正義	九州大・病・薬
木村孟淳	第一薬大	堀越勇	富山医薬大・病・薬
桑野重昭	武庫川女子大薬	松浦博	徳島大薬
久保道德	近畿大薬	水野瑞夫	岐阜薬大
小林凡郎	北里大薬	宮崎元一	金沢大薬
三川潮	東京大薬	森田直賢	富山医薬大薬
清水龍夫	福山大薬	山内辰郎	福岡大薬
清水正夫	横浜赤十字病・薬	山川浩司	東京理大薬
代田久米雄	厚生省	山崎幹夫	千葉大薬
田中治	広島大医・薬	山田健二	東京薬大
多田敬三	共立薬大	吉岡信	東邦大・薬
高畠英伍	摂南大薬	米田該典	大阪大薬
竹中祐典	国立衛試	順不同, 1986年5月1日現在	

◇編集後記に替えて◇

Götz氏は日本薬史学会の活動分野として薬史学雑誌に表れた研究トピックを次のようにまとめています:

歴史的展望, 薬局方, 実際薬学, 薬事法, 教育, 企業, 生産の歴史, 与薬と調剤, 処方せん, 製剤, 発見, 書籍, 学術用語, 薬系人物伝, 薬用植物(生薬, 栽培, 採集), 生薬学

民族薬, 中国医薬, 現代薬学, 軍薬学, 医薬分業, 特許と売薬。

(以上, Beiträge zur Geschichte der Pharmazie 36, 1984, 24, 209ページより)

このように見ると、薬史学研究のテーマの広いことが改めて感ぜられます。会員の方々の独自の取組みを心から期待いたします。(K)

薬史学会通信No.2 訂正: P.2, 左列, L.8, B.C.→A.D., P.3, 左列, L.24, 困→因。